

ニュージーランド先住民における学と宗教：ゼマン ティックとシステム分化形態との相関

伊藤，泰信
大分県立芸術短期大学

<https://doi.org/10.15017/2340956>

出版情報：九州人類学会報. 30, pp.81-87, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



ニュージーランド先住民における学と宗教 —ゼマンティックとシステム分化形態との相関—

伊藤 泰信

(大分県立芸術短期大学)

I. はじめに

趣旨文で述べたように、本稿は、近代社会を、社会分化の視点から捉え、脱中心的な社会であるとする、ルーマンのマクロ社会学的な知見から出発する。つまり近代において、宗教も政治も経済も分化・自律化し、社会全体をコントロールするシステムたり得ないという出発点である。宗教について言えば「それは主に教会や寺などの組織でやっていることであり、政治や経済、学問や教育などとは切り離すべき」ということになり、宗教を正当化する論理を他の諸システムはもたない（他の諸システムも宗教を正当化する論理をもたない）ということになる。そのようなシステム論的知見を出発点にしつつも、それとは異なる展開を見ているニュージーランド（以下 NZ と略）の事例をとりあげる。具体的にはマオリの学 (Maori Studies) という学システムを中心に議論する。学システムは真を追究するシステムであり、宗教や親族や政治その他からは自律したシステムのはずであるが、マオリ学を見る限り、そうした自律性は損なわれており、宗教的な意味づけや、

親族の論理などが混在していることを事例から示す。さらにそうした学システムの自律性の欠如がマオリ世界で生まれたゼマンティック（社会の中で蓄積された意味の範型）との関わりにおいてであるということ論じる。

高度に複雑化した社会、とりわけ先進国において、マオリ学のように国立大学の学部や研究機関を持つ一方で、マオリ独自の宗教性や親族的共同性を含み、学問内容・方法においても組織においても「科学」とは別のパラダイムであるような学問領域を NZ 以外の他国で見出すのは容易ではない。この背景には NZ 国家の特有性、すなわち、白人・マオリの二文化主義の源であるワイタング条約がある。ワイタング条約とは 1840 年に英政府とマオリ首長達との間で結ばれた条約で、マオリの主権を英国女王に譲渡する代わりにマオリの諸権利が保障されるというものである。この条約はその後長らく有名無実化してきたが、マオリは、条約で保障された「タオンガ [宝]」には土地権や漁業権の他に言語や文化も含まれるとし、権利要求を掲げ運動を展開した。特に 1960 年代後半以降の復権運動により、

1975年（1985年に修正）に、条約内容が正しく履行されているかどうかを審議するワイタング審判所が設置された。そして1980年代以降のマオリ文化ナショナリズム、および政府によるバイカルチュラリズム政策が相まって、ワイタング条約を礎とした土地の返還や各種の権利要求が認められるに至っている。マオリ学校・保育園やマオリ学部（部）の成立は、この条約の（解釈された）理念に呼応しており、他国の先住民事情と比較するならば、その特有性が見えてくる。さらに社会変革に際して小回りが利く（人口350万人）こともそうした動きに拍車をかけていよう。そしてこの特有性のために、マオリ自身によってコントロールされる（言語教育を含めた）マオリの独自性・個性の色濃い教育・学問領域が分離主義的に拡大する傾向は、近年益々増大しこそすれ、縮小することはないように筆者には観察される。

II. マオリ学（Maori Studies）について

NZ 社会人類学（部）から分化・独立した学（部）であるマオリ学は「マオリによるマオリのための学」などと形容され、パケハ〔白人系住民〕に対してマオリという民族が自己確立するための学であるとされる。マオリ学は、西洋近代知的な視点（科学主義的な視点）からはとても学システムとは言えそうにない諸特徴を備えている一方で、学を学たらしめる形式（国立大学におけるポジションやマオリ学ジャーナルなど）を整えている。以下、長年人類学的研究の対象となってきたマオリの人々の知識体系が、今日、制度・形式面において、人類学や他の社会科学等と同じように「学問領域」を形作り、白人研究者を実質的に排除しながらアカデミアに着実にポジションを得つつあるという事態を取り上げる。

NZ の 8 つの国立大学すべてに在るマオリ学（部）は、社会人類学（部）から分離・独立した学（部）である。マオリ学が成立し、大学においてそのポジションを確立するに至る足がかりとして、マオリの都市への大規模移住という要因がある。戦中・戦後の20年間でマオリ人口の半分以上が村落コミュニティを離れて都市部へ移動するという大きな変化が起こった。1950—60年代、マオリとパケハ〔白人〕が都市においてインタラクトするというコンテクストのなかで、マオリの知の個性・アイデンティティの希求が、マオリ学の成立を要請したものと考えられる。そこには都市生活の中で、自らの文化的背景を喪失しつつあるという危機感が高まり、マオリらしさを求めるようになったという背景がある〔内藤1999〕。マルクス主義的な角度から換言すれば、都市化の中での、失業から来る貧困や、茶色いルンペン＝プロレタリアートであることから逃れようとするれば、結果として（パケハとは異なる）先住民マオリの知の個性を主張しなくなってしまうということである〔Rata 2000〕。こうしたコンテクストの中で、1970年代以降の文化復興・復権運動の高まりがマオリ学（部）成立と展開に拍車をかけた。

現在は、パケハ研究者（人類学者）がマオリ学から排除される形になっている。マオリについてのパケハ研究者による研究が皆無というわけではないが、しかしそれは歴史的研究あるいは言語研究などに限られるようになってきており、マオリ社会文化についての同時代的な研究からは実質的に手を引いている状況である。このような事態が生起している原因としてマオリ文化運動の主張があった。それはすなわち、「これまでマオリについてパケハ人類学者によってばかり書かれてきた、今後は自分たちの手で」という政治的なものや、「マオリの知が

社会科学のそれと異なる」といった認識論的なものである。後者は、対パケハという軸で形成されたアイデンティティに由来するもの、すなわち、「自分たちマオリがいかにパケハと違うか」という観点を軸として纏め上げられた、パケハ的（社会科学的）知の倒立像とでも言えるような認識論であり、それは先に述べた都市化が関係している。

マオリ学部には付属の施設としてマラエ[伝統的集会所]がすべての国立大学およびポリテクニクのマオリ学部設置されており、マオリ人スタッフや学生の集合的アイデンティティの要となっている。さらに90年代半ばごろからマオリ学のジャーナルや学会が形作られつつあり、ディシプリンとしての形式を整えつつある。

筆者はB大学マオリ学部で、「マタウランガ＝マオリ[マオリの知識]」や「テ＝アオ＝タフィット[古きマオリ世界]」などの科目を初めとするいくつかの授業に自由に出席できる機会を得た。例えば、テ＝アオ＝タフィットの授業では、「タンガロア[海の神]」の題目のもと、ポリネシア人の伝統的航海術の知恵について具体的な知識が教授される。また、マオリはカヌー船団にその祖先を系譜的に辿ることができるが、ワカ[カヌー]船団や船長の名前、などが詳細に教えられる。その他にも、「タネ[森の神]」という題目のもと、まずランギ[父なる空の神]とパパ[母なる大地の神]からタネ[森の神]が生まれ、さらにそこから種々の樹木が生まれたこと、また、樹木によってそのファカパパ[神話系譜]の違うこと等々が非常に詳細に教えられる。それらはあたかも（筆者から見れば）神話学の授業のようであるが、しかしそれらが何らかの理論的枠組みに還元されることはない。それぞれの樹木の神話系譜についての説明がただひたすら続く、という場合も少なくな

かった。マタウランガ＝マオリの授業では、例えば、部族史や系譜についての知識の他、ファカタウキ[諺]・ペペハ[部族ごとの慣用句]・ワイアタ[歌]・モテアテア[詠唱]について、その言葉の意味などがマオリ的価値観と重ね合わせられて教授・学習される。セミナーでは、受講学生たちが、自らのハプ[亜部族]やファナウ[拡大家族]について、自分自身に至るファカパパを提示しながら、発表を行っていた。

以下、マオリ学部スタッフへのインタビューより、マオリ学の輪郭、特に認識論・方法論に相当するものを探してみたい。

「社会科学は科学が唯一の世界の理解の仕方とする。たとえば人類学は、ダーウィン進化論でサルから人間が生まれたとする。マオリにとっては神から来たもの。テ＝コレ[無]からテ＝ポ[闇]が生じ、さらにテ＝アオ＝マラマ[この世の世界]が生じた（そしてそこからランギ[父神]とパパ[母神]が生まれた）。科学は、マオリ独自の創世記を認めず、ダーウィン進化論のみで、マオリ的知を低く見なし、真実でないとする」。「マオリ語の中でのみ、ワイルア[inner-soul]が宿る。これが第一である。英語の中ではワイルアはない……。ペダゴジーについて言えば、まずカラキア[祈り]だ。授業の始めと終わりに必ずカラキアをする。歴史については、ランギ・パパというスピリチュアルなエレメントに戻る……」[B大学、マオリ学部・講師、社会学 Ph.D.]。

「日本人に墓（祖先をsymboliseするもの）があるように、私たちにはマウンガ[山]がある。山は先祖である。山には、アワ[川]が流れている、ワイルア[=inner-soul。ワイは水の意]が流れている。山は生きている」。「……すべてに

においてファカパパ [系譜] が関係する。例えば、この机のファカパパはラカウ [木] から。パケハ [白人] は、そんなのはおかしいと言う。しかしパパ [土地；大地の母なる神] がそれらを養っている。人間も同じ。我々は人間と自然を分離しない。土地がなかったら人間もない」[B大学、マオリ学部・教授、学部長]。

「マオリ学と社会科学との大きな違いは、パケハの知は物事をセグメントに切り刻んでしまうこと。政治・経済・学問……というふうに。マオリの知は inclusive で物事全てが分けられず、繋がっていると看做す。パケハは白黒はっきりさせるが、マオリにはスピリチュアリティが大切。例えばマオリにとってマウイウイ [病気] になったら、スピリチュアルなバランスが悪いということである。パケハはそれが触ることの出来ないものなので、無視する(白黒はっきりさせる)。スピリチュアルなバランスは見ることも触ることもできないので。リサーチにおいても、上手く行かないときにはバランスが悪い。調査もコミュニティの誰かに悪く思われていれば上手く行かない。ここにワイルアが関わる」[B大学、マオリ学部・講師]。

このように、マオリ学とは何か、人類学などの社会科学との差異は何か、という筆者の質問に対して、ワイルア、ファカパパといった言葉が頻出し、西洋科学とは異質な「ホーリスティックなマオリの知」という側面が強調される。

また、知識は個人に属するのではないとされ、共同的なアプローチやコミュニティとの系譜的関わりが強調される。

「パケハ [白人] は『俺が(調査を) やったんだ。俺の知識だ』という。調査によっ

て得られた知識は、調査者に属するのではない。コミュニティ・人々に属するのだ」[B大学、マオリ学部・講師]。

「パケハはマオリと違い、自分の業績・論文のために調査する。マオリの調査者は、(コミュニティにおける伝統スタイルの) 集会のあとになって初めて調査を始める。長老がサポートする。長老が助けてくれなければ何も出来ない」[B大学、マオリ学部・講師]。

また、教官が同じ部族出身の学生・院生にチュートリアルを行い、学生の方も、同じ部族出身教官のもとに相談に行く、等といった傾向が自然に生じる、とされる。

マオリ学について、さしあたり纏めると、個々のディシプリンに切り刻まれないマオリ的知のホーリスティック性の強調、(個人主義的でない) 共同的アプローチ、親族・部族コミュニティの参加・繋がりに重きを置くこと等の諸特徴に加え、神々からのファカパパ [系譜] で表現されるマオリ進化論とそこへ繋がる自己のアイデンティティ確認、授業などの始めと終わりのカラキア [祈り] やファイコレロ [スピーチ] をすべきとする言説(宗教的なコミュニケーション) が不分離に入り混じるような形で、マオリ的な方法論・認識論を形作っている [Durie 1996] ということになる。

III. 学システムとその環境—ゼマンティックと社会システム分化形態との相関—

N.ルーマンによれば、社会システムとは「コミュニケーション」の連続的産出過程のことである [Luhmann 1984]。ここで言うシステムはオートポイエシス=システムであり、オートポイエシス=システムは作動上閉じた(閉鎖的な)システムである。

閉鎖的であるというのは、システム固有の「作動」、つまりコミュニケーションの連続的産出のみから社会システムが成り立っているということである。コミュニケーションから成る社会システムは、先行する（社会システムの）コミュニケーションにコミュニケーションを接続することを通して、社会システム自体を新たに産出する、というように、閉鎖的な自己準拠性を特徴としている。そうした閉鎖的なシステムと、その「環境」（システム以外のものすべて）との間には、入力や出力のやりとり（社会システムにおいては意味のやりとり）は存在しない。

学システムは、社会システムのサブシステムであるとされる（人類学や社会学は学システムのさらにサブシステムである）。学システムも、社会システム（の一部）であるため、コミュニケーションを連続的に産出している。学のシステムは、科学的知識をコミュニケーション＝メディアとして、それを連続的に産出する。

それぞれのシステムは、それぞれの仕方では世界を記述する形式を発達させている。法システムの内側から世界をみれば、合法／違法という法システム独自のコミュニケーションの形式に従った形でしか世界を記述できないように、科学システムにおいては、真／偽という独自のバイナリーコードで世界を記述する、ということになる。マオリ学がここで言う学システムだとすれば、それは、真／偽というコードで世界を記述しつつ、真なる科学的知識を連続的に産出し、環境（宗教システムや親族システム等その他の社会システム）に対して閉鎖的・自己言及的に「作動」しているはずである（マオリ学と宗教システムなどのシステムとの意味のやりとりは存在しないはずである）ということになる¹⁾。しかし、事例が示しているのは、それがそうはなってい

ないように見えてしまうことである。

このような事態は、前節で見たように、自分と同じ部族の学生に行うチュートリアルといった親密性（親族システムに割り振られるはずのもの）や、宗教的意味づけ（宗教的システムに割り振られるはずのもの）などと、学システムとが混在していることに起因していると筆者は考える。分化形態について言えば、学システムと、親族システム・宗教システムとが分化していないような事態が生起しているということである。

マオリ学という学システムと（マオリ）宗教システムとのカップリングについて言えば、学システムの自律性が失われているのだと言える。つまり、「それは学問ではなく宗教の話でしょう？」とか「宗教の話はさておいて、学問の話をしましょう」などという問いかけを拒否するような事態であり、我々にとって「自明」な弁別がうまく成り立たないような事態だからである²⁾。

ただし確認しておくが、この状況は、近代的複雑社会以前の、システムが「未分化」な状況（システムが機能分化する以前の状況 [cf. 福島 1998]）とは異なる。というのは、いったん同化政策によって、近代西洋型の社会システム分化構造がNZに移植された後（マオリのパケハ〔白人〕社会への同化後）のことだからである。

マオリ学は「ホーリスティック」なマオリ中心的アプローチを打ち出そう、創り出そう（文化ナショナリズムと形容されるマオリ文化復興運動の一部）としている。それは、19世紀の白人入植以来、1960—70年代あたりまでの、同化主義（その亜流としての統合主義）の流れのなかで、いったんは、自己準拠的に閉じたシステムとしての学システム（人類学など）を受容した、その後になってからのことである。マオリの社会状況改善と近代化のため、20世紀前半に活躍した青年マオリ党のテ＝ランギ＝ヒ

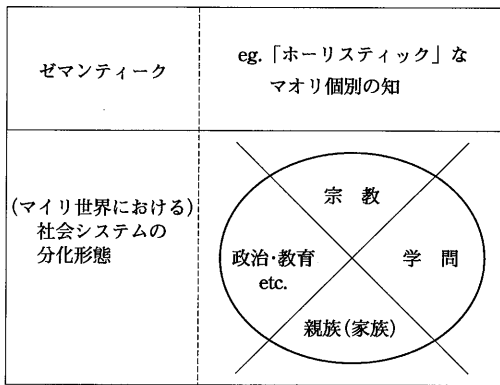


図1 ゼマンティック（上段）とシステム分化形態（下段）との相関

上図は次の事態についての見取り図である：マオリの都市化という社会変動によって → 文化ナショナリスティックな「マオリの知はホーリスティックである」というゼマンティックが生まれ（上段）、それが → マオリ世界におけるシステム分化形態に変化を及ぼす（下段）。

ロアらの活動をその例として挙げることができよう。学者でもあった彼らは、科学（人類学）のパラダイムを夢中で受け入れ、積極的に応用しようとしていた近代主義者であった。彼らであれば、例えば学的なコミュニケーションにおいて、ダーウィン進化論とは異なるマオリのファカパパ〔神学的系譜〕進化論について語る際、「宗教の話」と「学問の話」とを選り分けることが可能な、方法論的無神論者であっただろう。

図1は、マオリ世界におけるゼマンティック（社会の中で蓄積された意味の範型）と社会システムの分化形態との相関関係を表したものである。この図に沿って言えば、マオリの都市への大規模移住という変動やマオリ文化運動の高まりによって形成・蓄積されたゼマンティック、すなわち、「人類学や西洋の近代知とは異なる、ホーリスティックなマオリ的知識」というゼマンティックに引っ張られる形で、学システムと、親族システム・宗教システムのそれぞれが閉鎖的・自己準拠的に「作動」しなくなっているということになる。イメージ

としては、図1の下段の、科学システム・親族システム・宗教システム etc を分けている実線がぼんやりと薄れてゆく、というものである³⁾。

別の言い方をすれば次のようになる。学・宗教・親族・政治 etc というように、いったんは機能分化していた社会システムが、マオリ世界において今日、特殊な形をとりつつあることに、ゼマンティック（すなわち「マオリの知はホーリスティックでセグメントに分割したりパッケージ化したりはできないのだ」という意味の範型）が作用している、ということである。

IV. おわりに

マオリのパケハ〔白人〕世界への同化によって、システムの機能分化が一応「貫徹」ないし「終了」した後に、諸システムが「分化していないような」事態が（マオリ世界について言えば）生じつつある。それは、マオリの都市への大規模移住（都市化）という社会的変動の中で、対パケハという軸で民族が同一性を希求した際に生じ、マオリ文化運動によって固着した、マオリ個別の知（ホーリスティックなマオリの知）というゼマンティックとの相関によってである。つまり、「マオリの知がホーリスティックだ」という物言いがゼマンティックとして出来上がってしまうと、学と宗教・親族・政治システム etc.との分化（境界）を崩すようなかたちで作用するということである⁴⁾。

注

- 1) ここで宗教について言えば、救済か／劫罰かというバイナリーコードで世界を記述するということになるが、宗教はこれ以外にも道徳的基準になるか／否かといったコードなどが想定されるため、宗教に主導

的な区別はないなどとされる [Luhmann 1990=1996: 163ff]。

- 2) ただしこれは学システムを中心とした見方である。宗教システムの側から事態を見れば、趣旨文の註1で述べたように、宗教のもつ全体社会への意味づけ（世界の全てを説明しようとする）への希求、という宗教システムの特異性を勘案する必要がある。
- 3) ここで述べていることはルーマン流の知識社会学的な問題設定である。図1の上段の「ゼマンティック」を「知識（イデオロギー）」という語彙に、下段の「システムの分化形態」を「存在（社会）」という語彙にそれぞれ翻訳すれば、そのことはよりはっきりするであろう。
- 4) なお、本稿は拙稿（伊藤泰信「ニュージーランドにおけるマオリ学とシステムの機能分化」『社会分析』29号、2001）の骨子を纏め、大幅に修正したものであることをお断りすると同時に、詳細はそちらに譲りたい。また、参加させて頂いているメーリングリスト「ルーマン＝フォーラム」で得られた知見から示唆を受けていることも付言しておきたい。なお、本稿作成にあたっては文部科学省科学研究費補助金（特別研究員奨励費）を使用している。

主な参考文献

- Durie, M. 1996. "The Development of Maori Studies in New Zealand Universities", *He Pukenga Korero*, 1(2).
- 福島真人 1998「文化からシステムへ」『社会人類学年報』24。
- Kneer, G und A. Nassehi. 1993. *Niklas Luhmanns Theorie Sozialer Systeme*. Wilhelm Fink Verlag. (1995、館野受男他訳『ルーマン社会システム理論』新泉社)
- Luhmann, N. 1984. *Soziale Systeme: Grundriss einer allgemeinen Theorie*. Suhrkamp Verlag. (1993—1995、佐藤勉監訳『社会システム理論(上)(下)』恒星社厚生閣。)
- Luhmann, N. 1990. *Essay on Self-Reference*. Columbia University Press. (1996、土方透・大澤善信訳『自己言及性について』国文社)
- 内藤暁子 1999「都市のマオリ」青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市』青木書店。
- Rata, E. 2000. *A Political Economy of Neotribal Capitalism*. Lexington books.
- 高橋徹 1999「社会システム分化とゼマンティック」『社会学評論』49(4)。